

品川宿周辺に見るゆるやかな街づくりと ソーシャル・キャピタル

ローサ・リー

1. はじめに

地域に根ざし、様々な側面から住民の生活に関わる商店街が「地域コミュニティの担い手」(中小企業経営支援分科会商業部会[2009:3])として注視されるようになったのは、決して新しいことではない。通商産業省(現在の経済産業省)は1980年代から商店街を道路の整備や住民の福祉のような社会・文化的機能を果たす担い手に例えてきた(通商産業省[1984:19])。近頃は地域団体や住民も、商店街に街づくりの主体として期待を託している⁽¹⁾。

まち(商圈)の賑わいが商業の活性化に繋がることは、現場でまちと触れ合う事業者たちにもよく理解されていることであろう。しかし、激しい市場競争や消費パターンの変化、事業者の高齢化などの要因から衰退に晒されている商店街の人びとに、街づくりを試みる資源と意欲のあるものは少ない。このことは、1995年以降の「商店街実態調査」で「繁栄している」と回答する商店街の割合が2%以下であることからもうかがえる(石原・加藤[2005:4])。地域活性化事業に伴う金銭的負担は行政の支援制度で多少軽減されてはいるが、商店街の街づくりは、資金問題の他にも商店街内・外の利害および意見調整という難題を内包している。

商店街が個人事業者の集まりとして街づくりのような共同事業を図ると、組織内部の意思決定や利害調整などの運営問題が生じる。その上、街づくりは町会や住民のようにまちを構成する

様々な主体の協力と参加をも必要とするため、商店街が地域の活性という公益を追求することは他主体との協働を可能とする繋がり、すなわちソーシャル・キャピタルが必要となる。

ソーシャル・キャピタル論者を代表するロバート・D・パットナム(1994=2001:206-7)を引用すると、商店街の街づくりは主体たちの「活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」を形成し維持する課題を伴う。なお、商店街による街づくりの成功例を注視した小長谷他(2006)によれば、ミクロな水準のソーシャル・キャピタルには①活動の互酬性を作り出し、ネットワークの質(信頼)を高める「革新(イノベーション)」という仕掛けと、②その革新を請い、許容できる範囲を持つネットワークが必要である。すなわち地区の主体に限らず、外部者も街づくりに関わることを可能とする「街づくり組織のソーシャル・キャピタル」が地域に革新をもたらし、主体間の繋がりを強めるという主張である。

それでは、様々な主体が共存する都市のまちにおいて、商店街はいかに街づくりネットワークに関わり、地域に革新をもたらすことができるのか。本稿では東京都品川区旧東海道品川宿周辺(以下「品川宿周辺」と省略)の街づくりを事例に、商店街を含むまちの主体たちが立場を超えて、同等な地域の担い手となりうる街づくりモデルを紹介したい。

II. 旧東海道品川宿周辺の街づくり

昭和63年10月に街づくり組織「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」(以下「協議会」と省略)が立ち上がったのは、地域の商業者、住民と行政が同年に行われた『東海道五十三次シンポジウム』に参加し、まちの歴史・文化的価値を発見したのがきっかけであった。商店街の人々を中心に、「いつまでも祭りが続けられるまち」を目指して20年以上も街づくりを続けてきた協議会は、まちや商店街の集客力の強化、祭りを通した旧・新住民の協力や「防犯パトロール」による犯罪率の減少など、様々な実績を残している。なお、地域商店街や商業者の活動が活性化事業の模範として紹介されたり、東京商店街グランプリを受賞するなど、品川宿周辺の街づくりは成功例として注目され、国内に止まらず、海外からも行政や教育機関の団体が視察に訪れることも多い(交流館日記[2012年8月14日],[2011年5月22日])⁽²⁾。

現在も会長を含む多くの会員が商業者であり、地域の商店街組織にも関わっているが、協議会の活動は一般的な商店街が主導する街づくりとは違う。協議会と商店街のいずれもリーダーの立場を取らず、自主的な事業を行いながら他主体の取組みに協力する形で地域の街づくりを担っているからだ。品川宿周辺の街づくりの担い手たちは、このように主導者と協力者という二重の役割を共有しており、それによって共同の街づくりを実現している。

昔からの住民や商店が多く、町内会のような従来の共同体も存続しているとはいえ、このまちにも主体間の葛藤や対立は存在する。活動初期から協議会も何百年も対立してきた南品川と北品川の関係を円満にするために「南北綱引き大会」や「まちのお宝の発表会」を行うなど、まちの人々が南・北、及び旧・新という境界を越えてお互いを分かり合う機会を作ってきた。

そして主体たちの協働を図るため、協議会は各主体が「自分たちの手で自分たちのまちをつくる」(協議会[1995:2])意識を持てる街づくりモデルを勧めている。

協議会の街づくり計画書(協議会[1995:2])によると、この地域の街づくりは「みこしダコを伝える」という趣旨に基づいている。このまちの神輿の担ぎ手には、担ぎ棒を首の後ろにかけて自分の好きな方向に向ける風習が昔から伝わっており、祭りの時はあばれるように進行する神輿が見事な風景をなしている。この際に担ぎ手の襟首に出来る「みこしダコ」が、品川宿周辺にしかない魅力としてまちの自慢にされている。つまり「みこしダコを伝える」とは、まちの固有の宝物を共に愛しみ、次代に継承していくことを意味する。この志を共有するならば、街づくりには「どなたでもウェルカム、どんな提案もオーケー、全てオープン！」(協議会[2012年8月27日DL])である。このように、品川宿周辺では担い手の立場や街づくりの手法に拘らず、共に生きるまちを自由に作っていくことが試みられている。

品川宿の街づくりは、地域のために努力する誰にでも開かれているだけでなく、主導者であれサポーターであれ、街づくりの役者全員が同等な地域の担い手であることを前提にしている。協議会はまちの主体たちの関係を「主役も脇役もない」(協議会[1995:5])神輿のタテ棒とヨコ棒に例え、それぞれが平等であると強調している。なお、各担い手はできる範囲内で自主的に街づくりを行いながら、他の主体の街づくりに協力すればよいため、好きな形で街づくりに取り組むことができる。なお協議会による街道の整備やお休み処の設置、お祭りの運営などの街づくり事業が地域の主体たちに担われるべき義務ではなく、各主体に街づくりを進めるためのきっかけとして捉えられていることも、地域の担い手たちがゆるやかに繋がっていることを表

す。

利害関係や立場に関係なく、まちのよさを大切に、育てていく思いを共有する主体全員が地域の担い手として尊重されることは、品川宿周辺における街づくりネットワークが広範に開いていることを示している。従って、従来から金銭的利益を優先する「商人」であるが故に公益の産出という問題において地域の住民から外部者として捉えられがちな商店街も、他主体と同等な立場を持って街づくりに関わることができる。その上、様々な主体が自由に街づくりを実施できるゆるやかさは、商店街が商業の活性化という私益と、まちの活性化という公益を同時に追求することを可能とする。つまり、街づくりのネットワークが広いだけでなく、ネットワーク内の繋がりやゆるやかさがこのまちのソーシャル・キャピタルを強化していると考えられる。このようなゆるやかさに特徴付けられる品川宿周辺の街づくりを「ゆるやかな街づくり」と称し、次節で地域の商業者による街づくりの実例を取り上げて、ゆるやかなネットワークと革新の関係を考察しよう。

III. ゆるやかな街づくりにおける商店街

品川宿周辺ではまちを元気にするための努力が街づくりと認められるため、商店街活性化事業も街づくりの一部になりうる。まちと商店街の賑わいが一体化された街づくりの実態を、商店街の側から確認していこう。

III.1 商店街個店の事例

品川宿周辺の街づくり活動は、地域商店街に人々の出入りと交流がより頻繁になる結果をもたらした。なお、商店街に位置する協議会の活動拠点「お休み処」は、地域情報の発信地であるとともに住民や来訪者たちが交流を持てるま

ちの広場となって商店街に賑わいをもたらし、若者を惹きつけるきっかけにもなっている。北品川本通り商店会の空き店舗に、地域融合型民宿「ゲストハウス品川宿」を開業した渡邊崇志さんもその一人である。

渡邊さんが「国境を越えて、個人と個人が繋がる」(街元気[2012年1月6日])観光ビジネスを商店街に設立し、街づくりに取り組むようになったのは地元の自治会長を介した協議会との出会いが大きい。街づくり事業の一部として宿泊施設を計画していた協議会は渡邊さんのヴィジョンに共感し、長年の活動で蓄積した街づくりのノウハウや地域内の繋がりをを用いて積極的に支援した。協議会の紹介で観光案内所や近隣の旅館でボランティアや修行を体験しながらまちのネットワークに関わってきた渡邊さんは、その繋がりから商店街の宿泊施設が休業するという情報を入手し、2009年に民宿を開業した。

ゲストハウス品川宿にはキッチンやバスルームがないため、宿泊者は商店街の飲食店や銭湯を利用しなければならない。この仕組みにより、商店街に観光客といった新規顧客が立ち寄る他にも、まちと宿泊者の触れ合いが地域の魅力を国外にまで発信することとなった。なお、渡邊さんは国際交流のような「感動づくり業」(街元気[2012年1月6日])に止まらず、地域観光案内所の支援や祭りの協力といった形でも街づくりに取り組んでいる。まちの資源を活かす商業活動によってまちに賑わいを吹き込む一方、その資源を磨くための街づくり活動に協力しているといえよう。

このように、個人事業がまちと商店街の両方を活性化する事例として、ゲストハウス品川宿が挙げられる。勿論、渡邊さんの場合は地域の資源を用いる商業に取り組んでいるので商業活動と街づくり活動が重なりやすいが、彼がまちの価値を活用できる背景に協議会と町内会、及び地域の商業者や住民の協力があることを見逃

してはならない。まちの人々は渡邊さんに情報やノウハウを提供するだけでなく、宿泊客へのおもてなしを通して渡邊さんを支えている。地域の主体たちが個人事業も地域の価値を増す活動になりうることを受け入れ、渡邊さんをまちの担い手と捉えた結果、共同の街づくりが実現された。意欲のある主体を歓迎し、地域の担い手に育ててゆく街づくりには、商業者が私益と公益を同時に追求する機会が内在しているのである。

III. 2 商店街組織の事例

次に、協議会会員の青物横丁商店街振興組合(以下「あおよこ商店街」と省略)の街づくりの事例から商店街組織の役割を考えよう。品川宿周辺の南側にあたる京浜急行電鉄本線青物横丁駅辺りの商業地は江戸時代から「青物の市場」として賑わい、現在もあおよこ商店街として地域の消費生活を担っている。

品川宿周辺の街づくりを担う一員として、あおよこ商店街はICポイントカードや被災地応援のアンテナショップのような商業活性化対策に止まらず、まちをより元気にするための活動にも積極的に取り組んでいる。商店街として主導する街づくりの例は「少年・少女サッカー大会あおよこカップ」の主催、次世代事業者の人材育成と交流の場「燦燦会」の運営などが挙げられる。また、協議会主催の「しながわ宿場まつり」や住民による街づくり団体「なぎさの会」主催の「しながわ運河まつり」を支援するなど、あおよこ商店街は街づくりのサポーターとしても活躍している。本稿では、防災イベントという商店街の事業としては珍しい取り組みに注目しよう。

2012年2月に開催された「しながわ地域防災シンポジウム」では、あおよこ商店街関係者、近隣の企業、品川区役所、町内会と協議会が集

まり、地域が抱える防災上の課題や各参加者の役割及び防災対策を議論しながらお互いが日常的に連携を図る重要性を確認した。防災という地域全般の関心問題を取り上げることによって、あおよこ商店街は普段の関わりが少ない地域の主体たちが顔を合わせ、まちについて話し合うきっかけを作ることができた。また、シンポジウムは利便性や再開発事業で増えつつある地域内の企業と連携し、地域に通う会社員や新しく移住してくる住民に商店街を紹介する機会でもあった。

あおよこ商店街は商店街という空間に限らず、もっと広い視野から商圏(まち)を捉え直したことによって、地域の変容やニーズに適した活性化取組みを実施することができたのではないかと考えられる。様々な主体が街づくりに関われるゆるやかさは、それぞれの担い手がお互いの想定するまちを地域の一面として認める結果をもたらす。まちの顔として、あおよこ商店街は商業地や住宅街のいずれにとっても共存の生活空間を成していると思われるから、商業の利益に直接的な影響を与えない取組みも図れたと考えられる。

なお、あおよこ商店街の街づくりが独自に実施する活動と、他主体が主導する活動の後援にわけられることに注視したい。同じ地域の商店街組織でも各組織が抱えられる事業はそれぞれの力量によって異なるので、協議会会員同士の商店街組織でも同様に組み立てる街づくりは限られている。このことを考えると、共同で担える事業は一緒に取り組み、その他は個別で関わることができる街づくりにこそ、地域の様々な主体が担い手になりうる機会があるのではないかと考えられる。広くゆるやかに繋がり、ある時は一緒に、そしてある時は独自に動ける自由があるから、品川宿周辺の主体たちは共にまちを担えるのであろう。

IV. ゆるやかな街づくりにおける革新

様々な主体が共生する都市のコミュニティを変えるためには多くの主体の参加と努力が必要だが、立場の違う主体たちが協働を図るのは安易ではない。商店街も、地域の一員としてまちを担うためには、住民団体やNPOのような他主体と繋がり、お互いの街づくりに協力する環境を整わなければならない。品川宿周辺では様々な主体がまちをよくするために、それぞれにできる範囲の街づくりを試みることで、共に地域コミュニティを支えられるゆるやかな街づくりが実現されている。

ゆるやかな街づくりにおいて各主体はまちの一員であり、それぞれが想定するまちは地域の一面と捉えられるので、個人事業者や商店街組織はまちの担い手に、そして商店街はまちの顔になりうる。従って商店街を含む地域の担い手たちは、まちを広範囲な共存空間として意識し、それぞれが試みる街づくりがみんなのまちのためになると認めるようになれる。街づくりのネットワークが広く開かれ、ゆるやかに繋がっているため、事業者のようにコミュニティの周辺に置かれがちだった主体も街づくりの主役となり、従来の街づくりに新しい視点を持ち込むことができるのである。このように考えると、ネットワークの広さは小長谷等の主張通り、空間的に広いだけでなく、概念的な側面においても広範囲である必要が窺える。つまり、これまでコミュニティ生活の外部に置かれがちだった事業者や障がい者、外国人といった主体をも許容できるネットワークも、ソーシャル・キャピタルの質に繋がると考えられる。

しかし、街づくりの機会が開かれているだけでは、都市のコミュニティを担うそれぞれの主体が繋がることにならない。品川宿周辺でも、地域に根ざす利害関係を乗り越えるネットワークの構築には、従来の繋がりから離れた第三者、

すなわち協議会による、ファシリテーター(調整役)としての介入が必要であった。ファシリテーターは主体たちをまとめるリーダーではなく、各主体が街づくりに「意欲的に取り組むように手助けする役割」(木下[2007:68])である。調整役として、協議会は主体たちが対話を通してお互いが生活空間を共有している「意識をもって主体的に取り組む」(木下[2007:203])機会を街づくりに取り入れている。協議会という革新は、ゆるやかな街づくりを実施できる状況を整うことによって、商店街という更なる革新を街づくりに吹き込むことができたと考えられる。

品川宿周辺の事例は協議会や事業者のように、従来のまちという概念に含まれない外部者の介入が、街づくりに自由なコミュニケーションの場をもたらし、革新を持ち込める可能性を示す。街づくりを可能とするソーシャル・キャピタルに必要な外部からの刺激は、空間的な外部に位置する主体のみを指すのではなく、従来のコミュニティの中心から疎外されがちな主体という革新をも含むのではない。

V. おわりに

品川宿周辺のゆるやかな街づくりは、まちに貢献したい誰もが好きな形で地域を担うことが許容される故に、地域で共生する様々な主体がお互いをまちの一員と認め、またお互いの想像するまちを地域の一面である意識することによって都市型コミュニティを支えあう実例である。都市のまちのような様々な移住者の集まりでは、主体たちが共生という実態を意識することから街づくりのネットワークが活性化するため、ソーシャル・キャピタルの構築は主体の意識化を必要とする。協議会は従来の繋がりから離れた第三者として、自由なコミュニケーションの機会を通してまちの主体たちの意識化を引

き起こし、商店街というイノベーションを街づくりに導入した。街づくりに必要な革新を受け入れる広範囲なネットワークとは、従来の共同体に含まれなかった商店街のような「外部」を許容する新しい境界を意味するのかもしれない。

品川宿周辺の街づくりは、街づくりにおけるソーシャル・キャピタルの見解を深めるために、まちという共同体の概念を再考察する必要性を示す事例として、今後の研究の導きになると思われる。

註

1. 2006年のアンケート調査では、自治体の五割が地域の小売・サービス事業者への高齢者福祉サービスの委託を期待し、68%がイベントの開催、観光、地域資源活用において商業者と連携したいと答えた。住民の四割も商店街にお祭りやイベントを開催してほしいと答え、環境づくりや防犯・防災などの実施を期待している住民も三割以上であった(中小企業経営支援分科会商業部会[2009:3])。
2. 例えば経済産業省の中心市街地活性化プロジェクト「街元気」に協議会や本文に登場する渡邊さんの事例が紹介されている(経済産業省[2007])。なお、北品川地区3商店街やおおよこ商店街の取組みはそれぞれ第2回目と第4回目の東京商店街グランプリを受賞している(品川区[2012年10月11日DL])。

文献

青物横丁商店街振興組合「あおよこチャンネル」<http://www.aoyoko.ch/> 2012年8月27日DL.

中小企業経営支援分科会商業部会 (2009)『「地域コミュニティの担い手」としての商店街をめざして～様々な連携によるソフト機能の強化と人づくり～』中小企業庁経営支援部商業課。

石原武政・加藤司 (2005)『商業・街づくりネットワーク』ミネルヴァ書房。

経済産業省商業流通グループ中心市街地活性化室 (2007)『ひとりから始まる中心市街地・商店街づくり—元気で魅力ある中心市街地・商店街に向けて』中小企業庁経営支援部商業課。

木下勇 (2007)『ワークショップ：住民主体の街づくりの方法論』学芸出版社。

小長谷一之・北田暁美・牛場智 (2006)「まちづくりとソーシャル・キャピタル」『創造都市研究』1: 59-75.

交流館日記 (2011年5月22日)「フィールドワーク」<http://shinagawa-syuku.net/category/交流館日記/page/2/> 2012年10月11日DL.

交流館日記 (2012年8月14日)「韓国チュンチョン(春川)より視察の受け入れ」<http://shinagawa-syuku.net/category/交流館日記/> 2012年10月11日DL.

旧東海道品川宿周辺街づくり協議会 (1995)『旧東海道品川宿周辺街づくり計画書』旧東海道品川宿周辺街づくり協議会。

旧東海道品川宿周辺街づくり協議会「旧東海道品川宿周辺街づくり協議会」<http://shinagawa-syuku.net/overview/> 2012年8月27日DL.

街元気 (2012年1月6日)「宿場JAPAN 渡邊崇志「まち・人・世界をつなげる、現代の『宿場』づくり」<https://www.machigenki.jp/content/view/1417/436/> 2012年8月27日DL.

松本行真 (2006)「商店街活性化と街づくりの関係における一考察—祖師谷地区商店街を例に—」『日本都市学会年報』40: 106-116.

Putnam, Robert, D. (1994) *Making Democracy Work*, Princeton: Princeton University Press. =(2001) 河田潤一(訳)『哲学する民主主義』NTT出版.

品川区「商店街の受賞履歴」<http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/menu000008100/hpg000008022.htm> 2012年10月11日DL.

訪問記録

2012年01月14日 「品川宿交流館お休み処」にて広告担当の佐山吉孝さんへのインタビュー。

2012年01月24日 「品川宿交流館お休み処」にて運営委員会の参与観察。

2012年02月17日 「品川宿交流館お休み処」にて広告担当の佐山吉孝さんへのインタビュー。

2012年03月08日 「品川宿交流館お休み処」にて広告担当の佐山吉孝さんによる旧東海道品川宿街づくり協議会の活動報告の参与観察。

